**「声出し」が復活するなか、ライブの形はどのように変わっていくべきか**

**より多くの人が楽しめるようにするために**

**学籍番号：2322003　名　前：阿部佑哉**

**授業名：日本語リテラシー　提出日：2022年7月25日**

最近、あるアーティストのライブ映像のDVDを視聴した。2023年2月に行われたそのライブでは観客の声出しが完全にOKになっていたのだが、映像の中に度々入る、アーティストたちによるコメントの時間があった。その中で特に印象に残ったのは、ボーカルが語った声出しについての話だ。その内容とは、コロナ禍で生まれた新しいライブの形と、コロナ禍以前のライブの形が融合したら、もっと楽しいライブができるのではないかというものだった。ライブに参加してみたいと考えていた私は、新しいライブというものを是非体験したいと思い、これからライブがどう変化していくのか調査したいと考えた。本レポートでは、日本のライブの現状について整理し、コロナ禍が終息したこれからのライブについて今後どうあるべきか考察したい。

　『デジタル大辞泉』によると、ライブには3種類の意味がある。ラジオ・テレビなどの録音・録画でない放送を指す場合と、生演奏を指す場合、そして音や場所が反響することを指す場合がある。本レポートでは、生演奏の意味で記述する。

　日刊サイゾー(2023年1月13日)によると、コロナ禍で観客の声出しが禁止になり、着席での参加が義務付けられたと説明している。YAHOO!JAPANニュース(2023年2月5日)によると、コロナ禍で声出しが禁止になってから、手拍子でコール＆レスポンスを行う文化(クラップ文化)が生まれたという。この変化により、ライブには行ってみたいがコールなどは苦手なゆえに今まで参加をためらっていたファンがライブに参加しやすくなった。また、テレワークナビ(2022年9月28日)によると、コロナ禍に入ってからライブの映像を配信するオンラインライブが爆発的に普及した。ぴあ総研(2022年6月15日)の調査によると、2021年のチケット制有料オンラインライブの国内市場規模は512億円と推計した。これは前年の2020年と比べ14.4％増加している。このオンラインライブによって足を運ばずともライブを楽しむことができるようになった。しかし、YAHOO!ニュース(2023年4月5日)で言及されているように、もはやコロナ禍は終息し今までのような声出しなどの規制は完全に解除された。これを喜ぶ声はもちろん多いのだが、反対に前の方がよかったと感じている声もまた多い。そこで、よりたくさんの人がライブを楽しめるようにするためには、コロナ以前の良さもコロナ以後の良さも融合させていく必要があるだろう。そのためにも、ライブに行きにくいと感じてしまう理由を２点に分けて考えたい。

　一点目は、一部のマナーの悪いファンの迷惑行為だ。日刊サイゾー(2023年1月13日)によれば、コロナ禍以前はライブ中に激しく動き回ったり、音楽に集中できないほどの歓声をあげたりする客が存在していたという。マナーを守って楽しむファンが多い中でもそういった一部のファンの存在が目立ってしまい、ライブに忌避感を抱いてしまう人が少なからずいたのだ。また、フェスなどではもみくちゃになる会場内で故意に女性客の体を触る痴漢行為なども見受けられた説明している。ライブに集中できない迷惑行為だけにとどまらず、このような悪質な犯罪行為もコロナ禍以前は存在していた。

　二点目は、コロナ禍になってから起こったオンラインライブの爆発的な普及だ。テレワークナビ(2022年9月28日)によれば、コロナ禍でイベント自粛や外出自粛によってライブの中止などが相次いでいた。その中で無観客でのライブ配信などがはじまり、時間が経つにつれやがて有観客での配信ライブも行われるようになっていったという。このオンラインライブの利点は、会場まで行く必要がないため時間や金額の面でリアルライブよりもコストが低いという点だ。収容人数制限が緩和されていく中でも、有観客のリアルライブを配信するハイブリッド型のライブは色々なアーティストによって行われてきた。

　これらの資料からわかることは、コロナ禍になって生まれた新たなライブの楽しさがあるということだ。現状では、どのライブでもマスク着用の有無に関わらず全面的な声出し解禁や、その他規制の解除が行われている。コロナ禍でなくなってしまったライブの形に戻りつつある。その中で、コロナ禍の頃の方がよかったという声も上がるようになることだろう。コロナ禍になる前が恋しいと思う人もいれば、新しい形の方が自分に合っているからこのままでいいと思う人もいるのは当たり前のことである。

　では、今後より多くの人がライブを楽しめるようにするためにはどのようなことが必要なのだろうか。私がこの問題を通して考えたことは、盛り上がりたい人が他の客の迷惑にならないような環境作りをするということだ。例えば、ソーシャルディスタンスのように客同士の間に十分なスペースを確保することや、激しく盛り上がりたい人のための場所をつくるなどの措置が必要だ。その一方で、今後もオンラインでの配信ライブは続けていくべきである。ライブのオンライン配信の需要はコロナ禍の3年間で大いに高まっている。また、3年間の間で積み上げてきたものをコロナ禍が終息したからといって全てなかったことにするというのは大きな損失であろう。そして、ライブの楽しみ方は人それぞれという風潮が広まることも大切だ。先述したアーティストも、ライブのMCの時間に好きなように楽しんでくださいとファンに呼びかけていた。環境が整っても、ファン同士でライブはこうでなければならないと言い争っていては心置きなく楽しめない。新たなライブの形を模索していくだけでなく、ライブに対する人々の考え方をより柔軟にすることにも目を向けていきたい。(2272文字)

<参考文献・参考資料>

デジタル大辞泉 【ライブ】<https://japanknowledge.com.musashino-u.remotexs.co/lib/display/?lid=2001019108300>

(参照日 2023-07-26)

テレワークナビ(2022年9月28日)『【2022年最新版】ライブエンタメ市場の現況と今後の展望』 <https://www.nice2meet.us/live-entertainment> (参照日 2023-07-24)

日刊サイゾー(2023年1月13日)『コロナ禍唯一のメリット？　新型コロナで“一変”した音楽ライブ現場の実態』<https://www.cyzo.com/2023/01/post_333447_entry.html> (参照日 2023-06-28)

ぴあ総研(2022年6月15日)『2021年のオンラインライブ市場は前年比14.4%増の512億円に成長」』<https://corporate.pia.jp/news/detail_live_enta20220615_3.html> (参照日2023-07-24)

YAHOO!JAPANニュース(2023年2月5日)『コロナ禍で一変した音楽ライブ文化 進む「声出し緩和」でどう変わるか』 <https://news.yahoo.co.jp/byline/kawashimataro/20230205-00335587> (参照日 2023-06-21)